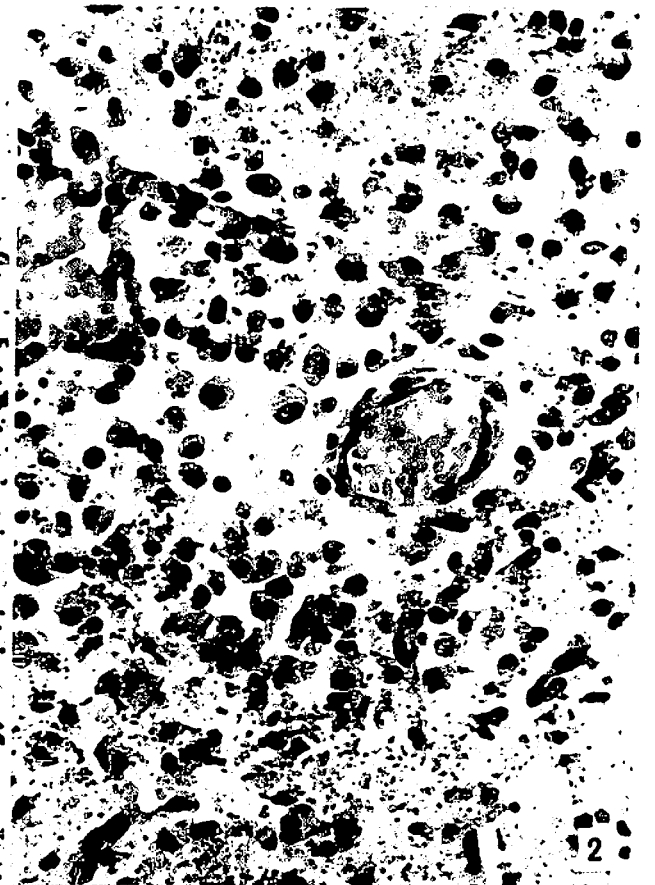


豚の脳灰白質における初期の脳軟化

酪農学園大学獣医学科家畜病理学教室出題 第16回獣医病理学研修会標本 No.253



症例および臨床的事項：1975年4月4日、残飯を主に飼育されていた豚群11頭において、1頭急死、3頭が食欲不振、T38.5℃、筋肉の震顫、チック、運動障害などを示し、残り7頭も軽度の同様症状を示す疾病が発生した。重症例は、治療するも4月8日、1頭斃死、残り2頭もその後斃死した。軽症例は、治療せざるも回復した。餌中の食塩含量は、多いと思われ、重症例血清Na量は、184mEq/Lと高値を示した。症例は、最初に急死した5ヶ月令の例である。

肉眼的には、脳における充血が著明であった。

組織学的所見：病巣は、終脳灰白質中位層における層状壊死よりなり、両半球に認められた。神経細胞は、核の萎縮、核濃縮、原形質がエオジンに好染する乏血性変化、重篤性変化、更にコッサ反応陽性の赤紫色顆粒状ないし細胞全体が均質赤紫色に石灰沈着を示すものなど変性、壊死に陥っていた。病巣部の血管は充溢し、V-R腔は認め難い。血管内皮の腫大、血管外膜の増殖など血

管の増生が著明で、血管周囲に巣状性、または瀰漫性にグリア・メセンヒーム性細胞が反応し、脂肪顆粒細胞も認められた。神経嚙現像も認められた。(Fig 1:×80, 2:×320)。石灰沈着は、変性神経細胞のみでなく、病巣部全域において、灰赤紫色塵埃状を呈して瀰漫性に認められた。好酸球の出現は、ほとんど認められず、一部の脳溝内血管周囲に認められるのみであった。

広範な壊死と、血管の増生、外膜細胞の増生、進行性反応が血管周囲にとどまっていること、脂肪顆粒細胞の出現が比較的少ないことなどから凝固壊死、もしくは初期の軟化病巣と考えられた。要因については、血清Na含量の高いことから、食塩による中毒と考えたいが、かかる病変のみから食塩中毒とは断定し難い。

その他、主要臓器における所見として、肝の巣状壊死、急性化膿性糸球体腎炎、急性線維素性化膿性気管支肺炎、化膿性リンパ腺炎、および全身の循環障害が認められた。